

『教科、教育および神：精神のための戦い』

テレンス・コプリー著

評者 佐々木 毅（国立教育政策研究所）

この記事は2005年2月に公刊された書物と同じ表題である。同書は世俗的な教化の過程が英国やその他のヨーロッパの社会において暗黙のうちに進行しているかどうか、もしそうであれば教育がこの要素の一つであるかを検討するものである。書物の主題のいくつかを紹介してみよう：教化の性質、「宗教的」と「スピリチュアル」という言葉が英国の言説の中で意味しようとしてきたものは何か、一方では世俗化の過程、他方では大衆的なスピリチュアリティの生き残りという矛盾した証拠。最後に特に神の問題に関係して教育制度を通じて伝達される価値。

教化は人々が他のものを見ることができないようなやり方で一つの世界観を与えられる時に生じる。教化は個人や集団の産物でもありうるし、世俗化のような特定の人間に結びつかず、計画によらない過程の結果でもありうる。宗教が主要な要因であったヨーロッパにおける最後の戦争（三十年戦争、1618-1648）の終結以来、ヨーロッパの人々は宗教に疑念をもっており、宗教的な教化に対しますます敵意をもつようになってきている。世俗化の容赦のない過程は過去50年間のうちに加速されてきた、その中でキリスト教会のような宗教的施設は周辺に追いやられ、宗教的な伝統は忘れられてしまった。多くの中から3つの例を選ぶことができる。まず宗教的な事物がその意味から切り離されるようになり、意味が失われている—チョコレート・エッグはもともとイースターというキリスト教の中心的な祝祭と結びついて、その時期に売られていたのだが、いまや一年中手に入れることができる。そのシンボリズムは忘れられている。第二の例は統計的なものである—教会への出席の激しい減少があり、それは政党や青年グループ等々すべての西洋の組織における成員の減少と相似するものである。最後に2001年の国勢調査は英国の人口の71.6パーセントがキリスト教徒であると主張していることを明らかにしているにもかかわらず

ず、非キリスト教徒の気を悪くしないようにとクリスマス・カードが「シーズズ・カード」として知られるようになった例に見られるような暗黙のうちに行われる世俗的な政治による修正を通じての宗教への攻撃である。

英国においては宗教的なのということとスピリチュアルなこととはもはや同一のものではなくて、対極にあるものとみなされるようになってきている。宗教は信者の人間的な自由が権威的な支配者、規則あるいは典籍にたいする従順と置き換えられるような閉ざされた信念の体系と文化的に誤解を受けている。この誤解は西欧において宗教についてきわめて頻繁に抱かれているものである。宗教的というのは体制順応的で、閉ざされた心を持ち、外部の規則に従順で、前近代的で、狂信的でありするものを意味するようになって来た。スピリチュアルなものの領域の中においては、西欧人たちは無批判で、軽々しく信じ、だまされやすくなっているようである。スピリチュアリティーはわれわれがまさに神のように、われわれ自身の宇宙を定義し建設することを可能にするものである。大衆的なスピリチュアリティーは生きており元気である一道端の交通事故現場に花を置くこと、ダイアナ妃の死の際に見られた大規模な追悼(1997)、占星術、幸運の石、幽霊を信じること、生まれ変わり、運命、迷信的な習慣等々。

この複雑で文化的な状況の中で子どもたちが神について何を教えられているかについての問題が生じる。というのは神の問題は数千年にわたりヨーロッパ人の自己理解の中心であったのではないか？もし公営の教育が子どもたちに神を信じることを教えれば、それはすぐさま教化という非難を受けるだろう。もし北朝鮮におけるようにそれが子どもたちに神を信じないことを教えるのであれば、それもやはり教化の非難を受けるかもしれない。また合衆国やニュージーランドにおけるように宗教も神もまったく無視するのであれば違った種類の教化、省略による教化が起きる。もし何か省かれれば、それが存在しないか重要ではないということの意味するからである。これは宗教的な教化と同じくらいに破壊的でありうる反宗教的な教化の一形態である。これらの問題に直面して教育はどのように前進しうるのか？教化は避けることができなものののだろうか？答えは簡単である。教育は神の可能性を教えなければならない。それは神が確実に存在することを教えることとも、神が存在しないことを教えることとも、そのどちらも教化になるのであるが、まったく違うのである。

宗教教育(RE)は連合王国における公営学校のすべての生徒たちにとって、親の意思による退席の条項つきで、カリキュラム内の教科として存在する。16歳プラスの全国試験においては宗教の受験者は歴史、地理、あるいは英国の学校において教えられている主要な外国語であるフランス語よりも多い。教化についてREがどのようにか

かわっているかははっきりしている。英国の RE は生徒たちの、現在そうしているように世界の宗教について教えつづけなければならない。共通に教えられている6つの宗教はユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、仏教とシーク教である。さらにそれは人生への姿勢として大衆的なスピリチュアリティと世俗的なヒューマニズムにも取り組まなければならない。しかし RE はこれらのすべてのことをすることができるが、依然としてヨーロッパの文化の中心的なジレンマ、神の問題に取り組むことに失敗している。教化を避けるためにそれは神の可能性を教えなければならない。その意味で宗教教育は(宗教が自らの信者たちに与える教授と違って)常に脱教化的であるだろう、なぜならばそれは生徒の選択を増して精神の世俗化に挑戦しなければならないからである。

テレンス・コプリー『教化、教育および神：精神のための戦い』はロンドンの SPCK(キリスト教知識振興協会 Society for Promoting Christian Knowledge) から出版されている。アマゾン・ブックスから入手可能である。(以上：佐々木毅訳)

コプリー教授はエクセター大学教育学部の宗教教育の教授で、宗教教育のほかに、トマス・アーノルドの研究でも知られる。